

STS Network Japan 春のシンポジウムのお知らせ p.2

STS Network Japan 総会とワーキンググループのお知らせ p.4

【報告】

STS Network Japan 夏の学校 2013 実行委員報告 p.5

STS Network Japan 夏の学校 2013 参加者感想 p.7

STS Network Japan メーリングリストに対するアンケート調査結果 (再掲)

# NEWS LETTER

2013 年度 vol.24 (2)

**STS NETWORK JAPAN**

STS は Science, Technology, and Society の略称です

# STS Network Japan 春のシンポジウム

## 日本における STS・科学技術社会論の 25 年

—その実際問題を、各世代の「若手」からのキャリアを通して考える—

STS Network Japan は、2015 年 3 月に設立から四半世紀を迎えます。今回の春のシンポジウムはこの 25 周年に向けた企画として、それぞれの世代の「若手」がどのように STS と関係しながらキャリアをこれまで形成してきたか、あるいは形成するにあたっての課題に直面しているのかという視点から、日本における STS・科学技術社会論という学術分野の実際の傾向や問題点を歴史的に浮き彫りにしていきたいと考えています。

日本における STS は、「既存の学問の殻を突き破る新しい形の科学技術論の研究・教育分野」であることを志向してきました。このように、学際的ないし学術界の枠組みすらも超えようとする新分野であることが期待されたこともあり、その活動においてはそれぞれの時代の「若手」が重要な牽引役を担ってきました。

そして、90 年代以降の高等教育・科学技術政策の変革などにも大きな影響を受けながら、さまざまな活動を展開してきました。その中で、「若手」の構成も時とともに変化し、当初の「若手」は科学技術社会論学会を発足させつつ学術分野としての社会的確立を目指し、その一方で STSNJ は新たな「若手」に担われながらより自由な活動を展開しています。

ただ、このように活動を社会的に展開するにあたって、その内容に科学技術政策への動員や新自由主義の影響が指摘されたり、あるいは学術分野としての基盤があいまいであるがゆえにキャリア形成を考える上でのディシプリンとしての脆弱性が指摘されたりしています。そして、このような問題意識から、近年あらためて「日本における STS とは何であった／何であるのか」を問い直す機運も高まっています。

そこで、今回のシンポジウムでは、STS 以前に若手であった世代も含めて、自身のキャリア形成と STS との関係についてそれぞれの世代の方々に話題提供してもらうことで、この四半世紀の STS の実際を当事者視点から浮かび上がらせていきたいと考えています。日本の STS はその時代において何であったのか、学術分野として何が期待され、どのように機能したのか。まずは、STS とは何か、や、どうあるべきか、を理念的に議論するのではなく、実際にどうであったのか、を歴史的に検証したいと考えています。

なお、多様な情報に基づいて、多様な可能性を検証したいと考えています。そのため、登壇者による一方的な情報提供ではなく、参加者全体からの情報提供も重視するような進行を考えています。世代を問わずさまざまな方にご参加いただけましたら幸いです。

※参加費、事前の申し込みは不要です。

※ STSNJ の会員でない方もご参加いただけます。

日時：3月29日（土）13:00-17:30（開場 12:30）

場所：早稲田大学 理工（西早稲田）キャンパス 52号館 101教室  
東京都新宿区大久保 3-4-1

※大隈講堂がある早稲田キャンパスではありませんのでご注意ください。

アクセス：JR 山手線	高田馬場駅から徒歩 15 分
西武鉄道	西武新宿線 高田馬場駅から徒歩 15 分
地下鉄東京メトロ	副都心線 西早稲田駅に直結
東西線	早稲田駅から徒歩 22 分
バス	新宿駅西口 - 早稲田、都立身体障害者センター前バス停下車 高田馬場駅 - 九段下、都立身体障害者センター前バス停下車

## プログラム

13:00 趣旨説明：夏目賢一（金沢工業大学）

13:20 小林信一（国立国会図書館）

「1990年代における高等教育・科学技術政策の質的転回と科学技術社会論」

14:00 松原克志（常磐大学）

「一個人のキャリアから考察する STS Network Japan の展開：1990年代までを中心として」

14:40 休憩

14:50 春日匠（原子力市民委員会）

「STSの失われた10年：2000年代の<STSバブル>と科学技術コミュニケーション批判」

15:30 標葉隆馬（総合研究大学院大学）

「現在の学問分野としてのSTSの現状とその課題、そして若手キャリアの可能性と現実」

16:10 休憩

16:20 コメンテーター：木原英逸（国土舘大学）、森下翔（京都大学）

16:50 総合討論「学術分野・キャリアとしてのSTS・科学技術社会論」

17:30 終了予定（18時まで延長の可能性あり）

18:30 懇親会：「Yearbook 2015 or 2020 特別記念号の検討」

# STS Network Japan

## 総会とワーキンググループ開催のお知らせ

---

春のシンポジウムの直前、同じ会場にて STS Network Japan 2013 年度総会を開催いたします。  
会員の皆様の、ご参加をお待ちしております。

### 【STS Network Japan 総会】

日時：3月29日（土）11:30-12:30

場所：早稲田大学 理工（西早稲田）キャンパス 52号館 101教室  
東京都新宿区大久保 3-4-1

なお、今年度は例年の「研究発表会」の代わりに、ワーキンググループの会合を下記日程で、開催いたします。

### 【STS Network Japan ワーキンググループ 第一回会合】

日時：3月29日（土）9:30-11:30（開場 9:00）

場所：早稲田大学 理工（西早稲田）キャンパス 52号館 101教室  
東京都新宿区大久保 3-4-1

本ニューズレターの最後にも再掲いたしましたが、本メーリングリストと会員の在り方について見直しを行うのが必要という認識のもと、今年2月はじめにワーキンググループにご参加いただける方の募集をメーリングリスト上にて行いました。

本ワーキンググループでは、メーリングリストだけではなく、STS Network Japan の活動や会員のあり方の見直しまで含めて、議論をしていきたいと考えております。

以下、今年度のワーキンググループの作業の経緯と今後の予定です。

2月4日：ワーキンググループメンバー募集開始

2月15日：メンバー募集締め切り

2月中旬～3月下旬：メール上で議題の整理と論点の抽出

3月29日：STS Network Japan 総会にて、オフラインで議論

3月29日：総会にていくつかの指針を提案

4月以降は総会での決定事項を受けて議論を継続する予定です。

皆様のご参加をお待ちしております。

## 実行委員報告記録

報告者 福本江利子・広瀬章博

昨年夏に開催しました STS Network Japan 夏の学校 2013 について、実行委員より簡単な報告をさせていただきます。

### ■テーマ

『STS において「実践」とは何か』

### ■とき、ところ

日時: 2013 年 8 月 30 日 (金) ~ 9 月 1 日 (日)

会場: 旅館伯梁

(静岡県静岡市、三保の松原のほど近く)

### ■報告

今年の夏の学校は、STS あるいはより広く学問や研究活動における「実践」について考えることを目的とし、『STS において「実践」とは何か』というテーマを設けました。企画者の側の問題意識には、STS には科学技術に係る問題解決や政策決定制度の構築への貢献を目指すある種の「実践志向」が存在するとの仮定の上で、そうした「実践」また「実用」や「有用」といったものにはどのようなあり方があり、またどのような可能性や限界を抱えているのか、根本に立ち返った議論が必要ではないかということがありました。

「実践」「実用」の意味合いや定義は場面や個人、また年代により異なると思われます。今回はあえて「実践」について企画者側から特定の定義や前提を提示することはせず、様々な視点や時間軸から STS における「実践」について考えることを目指しました。

1 日目には、開会直後のプログラムとして、新潟県小千谷市でのフィールドワークを通して自ら「実践」を行いました「実践」のあり方について検討されている菅豊さん（東京大学東洋文化研究所）をお招きし、2013 年 5 月に刊行されたご著書を中心に「研究者・専門家の実践をとらえなおす一菅豊著『新しい野の学問』の

時代へ—知識生産と社会実践をつなぐために』を題材に」として、ご自身の研究者また「実践者」としてのご経験や率直なご意見も交えお話しいただき、議論をしました。その後のナイト・セッションでは、STS における「実践」についてこれまでの展開から捉え直すことを目指し、STS における理論や実践の展開について簡単に概観し、議論を交わしました。

2 日目は、朝から夕方にかけて 5 名の参加者の方々が発表し、古典力学、著作権法、越境大気汚染問題、薬害エイズ訴訟、審議会分析と幅広いトピックを通して「実践」に迫りました。ナイト・セッションでは、山口大学で構想中の STS に関連する新学部計画についての動向を中心に STS 教育、人材育成について議論しました。

そして最終日には、アメリカにおける「政策の科学」の実践を取り上げて、政策決定に対する STS の貢献可能性や政策側と STS コミュニティとの関係性について議論すると共に、科学技術政策の現場におられる齊藤卓也さん（文部科学省）を STS に「入りこまれる側」としてお招きし、現在の科学技術政策決定現場での課題や STS をはじめとする人文社会科学分野の研究者コミュニティと政策過程などについてのお話をいただきました。会の最後には、3 日間のプログラムで得たこと、考えたことについて互いの意見や問題意識を共有する時間をもちました。

今回の夏の学校では、STS の領域にとどまらず、学問や研究活動において「実践」とは何なのか、どうありうるのかという広い意味での学問論も含む、極めて幅広い議論がなされました。STS における「実践」について単一の定義や答えにたどりついたわけではなく、その意味では今後も考え続

けるべき論点が残りましたが、むしろ参加者それぞれが、それぞれの研究テーマ及び知識や経験に照らし合わせつつ、自身の考える「実践」について再考し、また全体の議論にも貢献し、各自がそれぞれに気づきを与えあう会になったのではないかと思います。今回の参加者が今後実践に取り組んだり、または実践に深く関わる研究テーマを扱ったりする際に、この3日間の議論が何らかの形で生かされることがあれば、企画者として非常にうれしく思います。実行委員の方で設定した問い自体は漠としたものでありましたが、参加者それぞれが議論に貢献し、終始熱のある議論で充実した会となったと認識しています。

2夜ともナイト・セッションを入れるなど盛りだくさんのプログラム構成にしたため、途中はみなさんお疲れの様子もありましたが、全日程を通じて楽しくなごやかな雰囲気でも過ごせたかと思えます。会の合間に近くの海を散策したり、夜にお酒を飲みながら語り合ったり、有志で花火に繰り出したりと、正規のプログラム以外でも充実した時間を過ごすことができました。来年以降も、様々な年代そして領域で活動されている皆様にご参加いただくことで、夏の学校も充実していくのではないかと思います。夏の学校2013にご参加いただいた、学生から教員まで幅広い参加者の方々、また遠方まで足を運び貴重な議論の機会をくださった講師の方々に感謝いたします。

## 会費納入について

このニューズレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。

「12,13 未」と「13 未」は、それぞれ該当年の会費（2000 円）が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後ニューズレターの発送を中止します。

「12 不足」は、お支払いいただいている会費が2000 円には不足している場合で、「不足」の後の数字が不足金額を表わします。お手数ですが差額分をお支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由で STS Network Japan に関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1 年間ですので、送付が始まって1 年以内に入会の手続きをとられなければ、以後ニューズレターの送付を停止させていただきます。

会費は、以下の口座にお振込みください。

郵便振替口座 00170-1-63708  
加入者名 STS NETWORK JAPAN  
(年会費 2,000 円)

振込用紙の通信欄には、(1) 何年度会費（新規入会の場合は、そのように明記してください）、(2) お名前、(3) ご所属、(4) ご連絡先（住所・電話番号・e-mail）を明記してください。

※新規入会の方の会費は当該年度のものとして扱わせていただき、何月の入会であれ、その年のニューズレターが送付されます。

ニューズレターの郵送先に関わる情報、すなわち住所の変更、ご所属の変更、お名前の変更などがあつた方は、変更前と後の郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、電話番号、e-mail アドレスを事務局あてに、郵送か Fax, e-mail <office@stsnj.org> にてお知らせください。また、STSNJ の WebSite<<http://stsnj.org/cgi-bin/application/>> において、会員情報の変更を行うこともできます。どうぞよろしくお願いいたします。

# STS Network Japan 夏の学校 2013 参加者感想

## 参加報告 1

中尾悠里

(東京大学大学院総合文化研究科  
広域科学専攻修士1年)

今回の夏の学校は、STSにおいて「実践」とは何か?というテーマで行われました。STSという分野に属してまだ日が浅い私は、未だにこの学際分野の内容が一体どのようなものかをつかめたとは言えず、この機会に何かを分かることが出来るのではないかと思い参加しました。参加した中で明らかになってきたのは、ディシプリンがあるのかないのか分からない学際分野で知識生産を行う事は、分野の枠にとらわれない様々なアクターを巻き込める可能性を持っているという事です。1日目の夜に行われた江間さんと標葉さんのワークショップや二日目に行われた他の参加者の方の発表を通じて、STSがどのような知見を蓄積し、歴史的に発展してきたかを概観することが出来ました。しかしながら、それらは予め存在した知見ではなく、STSと言う分野が発展していく中で偶然に生じた知であるという事を感じました。STSという分野に部分的にでも属している研究者は、そうした、既にある知識を念頭に置きつつ、常に新しい知見を求めて広範に事例を集めていく必要がある、それが学際分野であるSTSの最も重要な点なのではないかと、STSに入ってまだ日が浅いながら、感じる事ができました。

また、その知見を実践に生かすためには、どうすればいいのか、という事も同時に考えさせられました。実際に研究者が実践活動の中に身を置く、もしくは、(最後のクロージングセッションで参加者の方が発現されていた内容ですが、)他分野に属する人がSTSの知見を使う

という事も考えられます。そうした中で、STSが社会に対してどう提示されるか、STSという説明しにくい学問分野の存在を、どのように示していくのか、と言う問題が現れると感じました。それは、もしかすると分野自体へのある種の権威付けを必要とする事かもしれず、一日目の菅豊先生のおっしゃっていた、実際に研究対象の中に密接にかかわって実践する形をとった「野の学問」と言うところからは少し離れてしまう事なのかもしれません。

こうした事を、夏の学校への参加を振り返って思い描いています。最後に標葉さんがおっしゃっていた「まだまだSTSにはやる事が沢山ある」という言葉が印象的で、よく覚えています。今回の夏の学校は、私の中で、そうした「STSがこれからやること」に関する議論を知るきっかけになりました。

今回は、初参加でしたが自分も発表をさせていただき、非常に多くの刺激を頂くことが出来ました。実行委員の福本さん、広瀬さん、並びに参加者の皆様にはお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 参加報告 2

岩堀英明

(東京大学大学院総合文化研究科  
広域科学専攻修士2年)

今回、初めて夏の学校に参加させて頂きました“地元参加”の岩堀です。私自身は、STSの研究を始めて1年半の初学者なので講演内容についての講評等は控えさせていただきますが、それ以外でも、様々なバツ

クグラウンドを持つ方々と貴重な意見を交わす機会を得られ、また、学会や研究室では知りえないメンバーの一面なども垣間見る事が出来るなど、刺激的で楽しいひと時を過ごすことが出来ました。これも、隅々まで気配りをしていただいた幹事の皆様のおかげと感謝しております。

初日、菅先生が「新しい野の学問」について語られましたが、STS-NJ やその夏の学校も、旧来型の学術活動に比して、インディーズ的な役割を持ち得るのではないかと感じました。ぜひ、今後も、このような形式にはまらない、ダイナミックな活動を継続していただきたいと思います。

さて、一点、元民間企業の技術者の立場として気になった点があります。参加者に、民間出身、経験者の方が少なかった点です。STS という分野的に、現役のサラリーマン技術者が参加するのはハードルが高いですが、OBの方は可能性があると思います。特に開発の第一線で、非常に生々しい体験をした方等に講演していただくのはSTS 的な視点から見ても非常にエキサイティングだと思います。次回以降、検討していただくとありがたいです。

それにしても、皆で合宿って楽しいですね。それでは、また。

### 参加報告 3

平清水史暁

(京都大学大学院文学研究科  
現代文科学専攻 博士課程1年)

2013年STS夏の学校参加者の皆様、合宿では大変お世話になりました。合宿初参加者には洩れなく感想文を記す権利が与えられるというお話でしたので、以下、やや冗長気味

ではありますが、私の感想を述べさせていただきます。

もともと私は科学史を専門とする人間として、STSの分野は全くの素人であります。故に、この合宿に参加した根底的な理由はといえば、単純に、“面白そうだから”という大変シンプルなものでありました。そういうわけで、私自身は予備知識ゼロの状態で合宿に臨んでいたわけですが、他の参加者の皆様の講演やお話を伺っているうちに、「STSにおいて私の専門とするところの科学史とはどのような位置付にあるのだろうか?」という、自らが所属する分野の、STSにおける評価が気になり出しました。これは、STSを専門とする方に直接伺った方が良かろうと思ひまして、実際にお尋ねしましたところ、概ね以下のようなご回答を頂きました。すなわち、第一に、「STSに歴史上の事例を提供すること」、そして第二に、「ある出来事Aが発生したとして、そのAが発生するに至るプロセスを分析することは、厳密には異なるかもしれないが、一見すると歴史研究と似たことをしている」とのことでした。この回答を頂きまして、私は「さもありません」と妙に納得したわけですが、では、翻って「科学史においてSTSはどのような位置付がなされるのか?」を考えたとき、これは科学史家である私自身が考え出さねばならぬ疑問なわけですが、これがなかなか答えが出て来ない難しい問題でありました。そこで、結局は合宿に参加しておられた科学史の先輩にご意見を伺ってみましたところ、「科学史にSTSの視点(分析の観点)を持ち込めば、それは従来の歴史解釈を再解釈し直すことにつながるだろう」とのことでした。このお答えにも私は「なるほどな」と納得したわけですが、しかし、この問題は我がことに関わる疑問でありましたから、より一層深く考えずにはいられないのでありまし

た。

「我がこと」と言いますのは、つまりは、私が現在手掛けている研究に密接に関わるという意味です。現在私が手掛けている研究というのは、戦時中に要職にあった官僚が遺した行政文書を丹念に読み込んでいき、その成果として、戦時中の政策形成のプロセスがどうであったのか、また、その際、政策に関与した官僚はどのような事柄に意を用いていたのかなどを明らかにしていくというものです。このように言うと何やら難しげなことをしているとお感じになるかもしれませんが、何のことは無く、これは愚直に資料を読み込み、そこに書かれている情報を取捨選択しつつ、最後に論文の形にまとめるという「読む」→「書く」の非常にプリミティブな研究手法をとっているに過ぎないのであります。しかし、手法がプリミティブな分このような研究はなかなか強力でありまして、すなわち、その資料の内容について誰もが知り得る情報は既に明かされているということでもありますから、改めてその資料を用いようとするならば、自らの考察における用い方というものを工夫しなければならないのであります。また、一見して有用そうな資料というものは、大概は既に先行研究で使用されておりまして、私のような後発の研究者に残された方途といえば、既存資料を工夫して用いるか、あるいは全く新規の資料を自ら開拓するかとの二択となります。私は専ら後者の方途をこれまで採って来たのであります。前者についても何か工夫はできぬものか常に考えてもおりました。そして、この工夫といものが、つまり、先ほどの「従来の歴史解釈を（STSの分析視点によって）再解釈すること」に他ならぬのであります。故に、私はこの問題を具体的に我がこととして深く考えることにしたのであります。結局のところ、「調べる」→「読む」→「書く」だけのプリミティブな仕方ではなく、そこに+ $\alpha$ の要素を用いなければ、

後発の研究者であるところの私にオリジナリティのある研究は出来ないという危機感を強くしていたのであります。

と、ここまで考えまして、では、ちょうど現在執筆中の論文で実際に何か工夫を施すことは出来ぬものかと考えを巡らせてみることに致しました。そうしました所、遂に合宿の最終日にて、「いやいや、ナイスアイデアとかそんな簡単に思い浮かばんし!」という結論に至った次第であります。残念ながらと言いますかやはりと言いますか、3日間という限られた時間内で画期的な発想に到達するというのは無理な話でありました…、ハイ。

とは言うものの、以上のような疑問がそもそも私の中で醸造されたこと、お考えを他の参加者の皆様から実際にお聞きすることが出来たこと、その結果として強い危機感と焦燥感をはっきり自覚出来たこと、そして何よりも、未だ言葉にして明確に表すことは出来なくとも「何か出来るんじゃないか」という感触を掴めたことは望外の収穫でありました。

これ以上のことは、今後私が研究室へ戻り、実際に思考していくより外はないことと考えます。今回の合宿の感想をまとめますと、上記で触れましたような“工夫”を今後とも私自身が“実践”していくことを持ちまして、“実践”をテーマとした今夏の合宿についての私の感想に代えさせて頂きたい次第であります。

以上、駄文を長々と失礼致しました。いずれまたの機会に皆様と研究のお話を出来ることを楽しみにしております。それでは、本日はこれにて失礼致します。

# STS Network Japan

## メーリングリストに対するアンケート調査結果（再掲）

### 1. 背景と問題意識

STS Network Japan メーリングリストは本来会費納入を行っている NJ 会員のためのものであるが、現在は非会員の方のご使用が増えている。一方で、議論の活性化は STSNetwork Japan の趣旨としては望ましい。本メーリングリストの現状把握を行うため、2013 年 2 月よりメーリングリスト上でアンケート調査を行った。問いは下記 5 問である。

- 問1 本メーリングリストが、STS Network Japan のメーリングリストであると知っていますか？  
（はい・いいえ）
- 問2 本メーリングリストが、有料である（STS Network Japan の会費で運営されている）ことを知っていますか？（はい・いいえ）
- 問3 あなたは STS Network Japan の会員ですか？（はい・いいえ）  
※ 2010 年以降、会費（2000 円 / 年）を納入している方を会員とします
- 問4 問3で「いいえ」を選んだ方にお尋ねします。本メーリングリストを今後も利用するため、会員になろうと思いませんか？（はい・いいえ）
- 問5 上記質問項目に対し、ご意見のある方は、具体的に記載をお願いいたします

### 2. 結果

2013 年 6 月の総会までに会員・非会員・事務局を含め 32 名からの回答があった。

以下に、その単純集計表と、問2と問3のクロス結果表を示す。

単純集計結果表					問2と問3のクロス結果表				
	問1	問2	問3	問4		問3			
						会員	非会員		
はい	32	22	19	10	問2				
いいえ	0	10	12	2		知らない	5	5	
未回答	0	0	1	0		知っている	14	7	

### 3. コメント抜粋（問5）

クロス結果表より、有料だと知っているか知らないか、また会員か非会員かでカテゴリ分けをし、それぞれの項目のコメントを抜粋して掲載する。

#### 【有料だと知っている、会員】

- ・年月とともに組織の役割も変化します。MLのありかたの見直しは当然必要かと思えます。NJもそれなりに代わってきていると思えますが、常に見直しは必要でしょう
- ・メーリングリストが会費で運営されている以上、参加者は会員に限定すべきと考えます。情報共有はもちろん、議論の活性化を図りたいのであれば、会員内でできることを考える必要があると思えます

- ・MLのメンテナンスにはコストがかかると考えます。有料化という方向は必要だと考えます。また、会員と非会員との差別化を図ることができると思います
- ・個人的にはメーリングリストを利用するために会員になろうというモチベーションはうまれにくいのではないかと思います。情報交換の場として開いておき、NJの活動に賛同していただける方には会員になっていただけるような窓口として機能できればよいのでは

#### 【有料だと知っている、非会員】

- ・有料MLの管理者が、発信権者に資格制限を設けるのは当然のこととしても、元会員の受信をどこまで容認するかは、MLの趣旨とオープン度の設定にかかわることとも言えるのではないのでしょうか
- ・無料のYahoo MLだとなぜわざわざ会費を払わなくてはと考える方もいらっしゃるのではないかと思います。もちろん、会費の一部を管理コストにあてているということで説明がつくかと思いますが、少し検討する時期に差し掛かっているかもしれません
- ・私自身がSTSNJに情報発信することもなく、単なるROM「会員」であるため、送金するのを初めは忘れ、そのうちに未納であることを意識しなくなっていました
- ・STSNJは学会とは異なり、より緩やかな連携の実現が可能な場ではありますが、だからこそ「シンプルなきまり」が必要にも思います。メーリングリストの件、会費の件等、シンプルなきまりを考えてみる機会が来たのではないのでしょうか

#### 【有料だと知らない、会員】

- ・MLが有料であることは存じ上げませんでした。移行は手間がかかるかとは存じますが、Googleグループなどへの乗り換えも検討してしかるべきでは、とも思います
- ・たぶん、会員として会費を払っていると思うけれど、よく覚えていません。今後のご発展を祈念しております。いろいろと勉強させていただきましたこと、心から御礼申し上げます。しかし、私はROM状態ですので、MLでの活動に寄与することがないと思います。Give and Takeができないため、この機会に登録を見直したいと思っております

#### 【有料だと知らない、非会員】

- ・会員だと思っていました。今回のメールを拝見して会員ではないことを知りました
- ・現在だと会員か非会員の2択ですが、「公開シンポジウムなどの情報は欲しいが、会員として関わるほどコミットできない」人が入れるメーリングリストがあると良い気がします

## 4. 2012年度総会における議論

本メーリングリスト、会員の在り方についての見直しをする必要があるとのご意見を多数いただきました。この結果を踏まえ、2012年度総会において、事務局メンバーや歴代の代表の方などにご参加いただいてワーキンググループを作り、次年度総会まで議論を行っていくことが提案されました。詳細はまたメーリングリストでもお知らせいたしますが、ワーキンググループに参加いただける方、ご意見のある方は事務局（office@stsnj.org）まで、ご連絡をよろしくお願いいたします。

また、現在会員名簿のアップデートを行っておりますが、会費納入をされた方で、納入実績が反映されていない方がございましたら、お手数ですが事務局までご一報をいただきますようお願いいたします。



## 編集後記

本号では、春のシンポジウムのご案内をさせていただきました。みなさまのご参加をお待ちしております。また、メーリングリストに関するアンケート調査報告も再掲いたしました。今後のメーリングリスト運営や団体としての在り方などについて議論するワーキンググループも開催いたします。みなさまのご意見などお待ちしております。

Newsletter Vol.24 (2) (通巻 No.74)

2014年3月12日発行

編集

STS NETWORK JAPAN 事務局

Newsletter 編集委員会

代表 森下翔

委員 東島仁 / 関谷翔 / 江間有沙

発行

STS NETWORK JAPAN

代表 森下翔

STS NETWORK JAPAN 事務局

〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16

大阪大学 全学教育推進機構

中村征樹研究室気付

E-mail: [office@stsnj.org](mailto:office@stsnj.org)

URL: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708

加入者名 STS NETWORK JAPAN

(年会費 2,000円)